

芭蕉連句評釈（一）：「うぐひすに」の巻（上）

杉浦，正一郎
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/12391>

出版情報：語文研究. 2, pp. 46-56, 1955-05-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



芭蕉連句評釈

(一)

「うぐひすに」の巻

(上)

杉浦正一郎

鶯に朝日さす也竹閣子

礼者うすらく春の静さ

やふ入の見やけ似合にこしらへて

又時の間にわるうなる空

火燧切寒もちかしくれの月

ひろい処を丸口にかる

旅人に銭をかはるゝ田舎道

かひこの臭き六月の末

雪たる網をはい引ちらし

小屋敷並ぶ城の裏町

謂分のちよつくと起る衆道事

梅咲そめて立花はやらす

年中を松の内より料理くひ

いせの状日のいそかしき春

上紺の木綿合羽に傘さして

湯屋の手透はハツさかり也

浪化

去来

同

同

化

来

同

同

同

来

同

化

同

来

同

化

名月のもやう互にかくしあひ

一アてもなき梨子の切物

(名)玉味噌の信濃にかゝる秋の風

不足な寺を無理に持する

右の手の振ひしたひに強ふなり

點かけてやる相役の文

此宿をわめいて通る鮎の鮓

青田うねりて夕立のかせ

平めなる石を敷たる行水場

給仕をさせて馬夫か食喰

月くらぎ夜の塩梅を屋てみる

聖靈棚はよほと窺屈

しのふ間を踊に出るとおもハせて

来てうからかす去年の傍輩

(名)参宮といへハ盗もゆるしけり

につと朝日に迎ふよと雲

芭蕉

同

来

同

同

化

同

同

同

来

同

同

化

同

来

化

蒼みたる松より花の咲こほれ

四五人とほる僧長閑なり

薪過町の子共の稽古能

いつつも春にしたきよの中

来 蕉 化 来

浪化十五
去来十五
芭蕉十六

本歌仙は越中井波の蕉門浪化上人撰『となみ山』(元祿八年刊)に収録されてゐるものである。

『となみ山』は他に歌仙四巻と発句少数を収めてをり、同じく浪化撰で発句を主とした『有磯海』と二書一部をなすもので、題簽下に小さく「浪化集上」「浪化集下」と刻まれてゐる如く『浪化集』の上・下にあたるのである。去来の『去来抄』によると、去来が『有磯海』となみ山の集名について芭蕉に相談したところ、和歌の名所のやうで紛らわしいから、浪化集と呼べと云はれたと記されてゐる。ところで同書によると、去来もこの集名については考へるところがあつたらしく、前の集名を残し、それに芭蕉の異見を加へて題簽に『浪化集』と小さく記したものと思はれる。

撰者の浪化は、東本願寺の十四代の門主琢如上人の季子にあたり、越中井波瑞泉寺の第十一代の住職である。俳諧

は早くから嗜んだやうであるが、芭蕉に入門したのは元祿七年閏五月の末のことで、去来の別墅洛西落柿舎に於いてであつた。この入門の折の様子は、元祿七年六月廿四日に杉風に宛てた芭蕉書簡に「越中の御堂東御門主の御舎弟浪化と申御隠居、御門跡御遷化ニ付上京、忌中ながらに去来迄被_レ尋致_二対顔_一候。門人ニ可_レ被_レ成由達而御申候を色_〳断り申候へ共、さまん御断り御申候而門人の約束致候」とあるので理解されよう。

その時浪化は廿四歳の若年であつた。謂はゞ彼は芭蕉最晩年の弟子で、彼が芭蕉の指導を受けたのは、閏五月の末から芭蕉が京に滞在してゐた六月中旬頃迄で、半月にも足らない短い期間であつたのである。一方浪化と彼の入門の手引をした去来との親交が何時頃から始まつたのかは明かでない。元祿七年刊の京の心桂撰『名月集』に、浪化・去来一座の歌仙が見えるが、この集は浪化の後見になるものであり、そして『名月集』の撰者心桂が東本願寺の僧官と思はれるところから、斯うした人達の仲介で、浪化が去来に近づくやうになつたものかと思はれる。そしてそれも元祿七年二月初旬の浪化上落前後のことではなからうか。その後両者の仲は非常に親密の度を加へたのであり、五月十三日には後年『去来文』として刊行されたかの長文の書簡を、去来は浪化に送り、蕉風の付合に就いて詳細に論じて

やつたのである。

この『浪化集』も去来自身、『俳諧問答』に「たゞ浪化集のみ、故有て此を助成す。もし浪化集に誤処おほくば、此予が罪のがれがたし。」と述べてゐる如く、去来の大なる助力になつたのであり、去来代撰とも云ふべきものであつた。而も前述杉風宛、芭蕉書簡に「就、其有會海集急御仕立、門人の発句共去来被頼少づ、取集候間、其元より御よせ可被成候」とあり、同年九月十日付、去来宛芭蕉書簡に「浪花集沙汰なき由、無心元存候。発句共御集置可被成候」と見えるので知られるやうに、浪化入門早々から去来が依頼されて集句にあたり、芭蕉も力を添へ、期待をかけてゐた集であつた。其後の彼等の間は『浪化日記』に窺はれる如く、その親密の仲は生涯変らなかつたのであり、浪化は北越蕉門の中心人物として大いに活躍したのであつた。ところが惜しいことに、この秀才俳士浪化は元禄十六年十月九日、三十三歳の若さで病歿してしまつた。去来は「その時や空に花ふる野への雪」の悼句を捧げ、深い悲しみを示したのであつた。そして当の去来も、若い親友のあとを追ふ如く、その一年後には故人となつたのである。

扱て、本歌仙の制作年時であるが、同じく『となみ山』入集の「葉がくれを」の巻の去来・浪化・芭蕉の第三迄と同じころになつたのではないかと思はれる。これには「蕉翁の

落柿舎に寓居し給ひけるころ、たづねまいりて、主客三句の情をむすび立かへりぬるを、云々」と前書があり、芭蕉の落柿舎滞在中の元禄七年閏五月下旬から六月中旬の頃までの間の作と思はれる。恐らくこの折、芭蕉出座の初折の裏の折端頃から続けられ、完尾したものであらう。浪化・去来両吟の初折の部分、それ以前、多分浪化上落の二月上旬頃興行されたものと思はれ、その一折を芭蕉の批正を仰ぐべく提出したのを、芭蕉が実地指導の意味から折端を付け直して、やがて三吟で付け進んだものではなからうか。

鶯に朝日さす也竹閣子

浪化

(釈) 発句、春(鶯)○竹閣子 細い竹をたてよこに透間のあるやうに組んで、窓などに取りつけたもの。

(評) 寺院や武家屋敷の書院の竹閣子の窓の側に吊られ、或いは置かれてある鳥籠、柔い初春の朝の斜光が窓から籠の鶯にさす。その光を受けて鶯はしきりに枝移りを続けてゐる。初春の閑雅な朝の景色である。ところでこの句は鶯にで切つて、朝日さすや竹閣子と続け、家外で鶯が鳴いてをり、朝日が竹閣子にさし込んでゐる、と解する事も出来さうである。然しそれでは鶯にのの助字に少し無理があるし、又、静的な竹閣子に朝日がさしてゐると云ふのでは全く面白くない。浪化の発句には鳥を詠んだ句が多く、それ

らは多く浪化の愛の眼が、小鳥の生態に注がれてゐるものである。こゝもさうした浪化の愛のこもつた眼が、春の朝日の射し込む鳥籠に動きつけてゐる鶯に注がれてゐるものと解しても間違ひないと思ふ、竹閣子は鶯と無關係に置かれたものではなく、鳥籠は竹閣子の側にあるのであらう。浪化の句は一般的に清澄であるが、この句も鶯、朝日、竹閣子の言葉詠み込むことによつて、また清らかな句となつてゐる。

礼者うすらく春の静さ

去来

(釈) 脇句 春(春の静さ) ○礼者 年賀に回る人。

(評) 正月も二三日迄は間断なく続いた年賀の客も、三四日と日がたつにつれて少くなる。而も今迄来客の応対に忙しかつたせいも、正月が改めて来たやうに殊更静かに思はれるのである。扱てこの句は、発句の初春の朝の閑さを、正月四五日過ぎの趣と見て、その頃の春の静さを付けたのである。礼者も殆ど訪れなくなつてひっそりした玄関、その竹閣子のほとりの鶯の鳴き声が邸内にひびいて、初春の静さが一層感じられる。この歌仙の初折の部分は何処で巻かれたものであらうか。去来が脇をつとめてゐることから、当時の連句の常識で考へるならば、去来邸―聖護院の森の家が、或いは落柿舎か――に於いてゐたらうか。

然し元祿七年の正月の頃は浪化は越中の井波にゐた様であるから、この脇句は歌仙が巻かれたその頃の景色ではなからう。

やぶ入の見やけ似合にこしらへて

同

(釈) 初表第三句。春(やぶ入り) ○やぶ入 正月十六日、農工商等にわたつて、使用人が雇主から一日暇をもらつて親元などに帰ること。七月十六日の藪入りは後の藪入と云つて区別する。養父入り、里下り、宿下りとも云ふ。藪入りの語源については、往くところのない者は林藪に入つて遊樂した為だとか、宿入りの誤りだとか説かれてゐるが明かでない。

「藪入の寝るやひとり親の側 太祇」

(評) 正月も日を経て、やがて藪入りの期日の近づくまゝに、郷里の両親や兄弟の為、日頃貯へた小遣ひから、その身に相応しい土産をいろいろと買ひとゝのへるのであらう。一年に二度の帰省は、苦しい奉公人達にとつては待遠しい嬉しい日に違ひない。それで数日前からあれこれと気を配り、土産物などの準備をしたものと思はれる。有名な蕪村の「春風馬堤曲」は、彼の郷愁を、藪入りで故園に急ぐ一女性の心境として述べたものであるが、幼い弟達や老母の待つ故家に足を運ぶ、藪入りの日の女性の気持が実にうまく描がかれてゐる。扱て前句に正月も数日を経た感じ

があるので、やがて間近い藪入りのことを付けたのである。発句脇句と敘景的な閑雅な句であつたが、こゝに人事を持ち出し、それも身分低い奉公人の様で、第三の転としては適当な句であらう。

又時の間にわるうなる空

化

(釈) 初表四句目。雑。

(評) 先刻まで陽が差してゐたのに、僅かの間にすつかり曇つてしまひ、何か降つて来そうな空模様である。陰曆一月頃だから雪気催の空であらう。吹きつけるやうに降ると思ふと、日が照り、又かけると云つた遽しい天気。前句里帰りの荷物を整へてゐる奉公人が、途中の空模様を案じてゐる様にとりなしたのである。

火燵切寒もちかしくれの月

同

(釈) 初表五句目。冬(火燵切)。月の句。○火燵切 新

に炬燵を造るのではなくて、畳などで寒いであつた炬燵を、火を入れられる様に開くことである。近世では、殆ど十月の中の亥の日に炬燵開きが行はれた。これは亥の日に炬燵をあけると、火災をのがれると云ふ俗信の為であつた。近松の『心中天の網島』には「十月中の亥の子に炬燵あけた祝儀とて云々」の有名な言葉が見える。

(評) 日が照つてゐたかと思ふと、降り出していく空模様を、初冬の時雨の様とみたのであり、時雨の降り過ぎた夕暮の空に、雲の間から顔を出した月、その月の光りにも一人の寒さが感じられるのであつて、炬燵切る季節が迫つたことを思ふのである。

ひろい処を丸口にかる

来

(釈) 初表六句目。雑。○丸口 まるごと、そつくり。

用例、「丸口砂にいくる白魚 竿水」(『梅桜』)

(評) かるは刈るであらう。薄や萱などの生えた場所を、そつくり刈り取ると云ふ意味と思はれる。前句に本格的な寒さの間近いことを感じたのであつて、その越冬準備に薄や萱を刈りとり、冬の間の燃料を貯へるのである。

この句は去来の句であるが、表現内容が明瞭でなく、駄句に過ぎない。

ウ旅人に銭をかへるゝ田舎道

同

(釈) 初裏一句目。雑。○銭をかへるゝ

銭を買ふと云ふのは、金銀貨を銭に両替えることである。『東海道名所記』に「銭を買ふには金銭を手放し」と見える。両替屋のない街道筋や地方では、銭が通用してゐた為金銀貨しか所持しない旅人は、日用の便に困却したの

であつて、その為、街道筋の宿場などには手数料をとり、金銀貨を錢に替へてやる錢売りを商売にする者もあつた。許六の「旅ノ賦」に「鉄行灯はくらく、紙はわらんべの心といふ事に燃たり。錢売、草鞋売にせがまれ、やう／＼枕をかたぶけ」とある。こゝはかべるゝと受身になつてゐるので、錢売りではなく、旅人の懇請で金銀貨を錢に替へてやつたのを、買はるゝと面白く云つたのであらう。

(評) 昔、旅行者は錢を所持していくのは道中重荷になるので、金銀貨を所持して宿場などで、手数料を払つて錢売りから両替してもらひ、小錢を得て、路用の資にあてたのである。ところで街道以外の地方では、両替を商売にする錢売りもあまりゐなかつたのではなからうか。

かの『猿蓑』「市中」の巻の芭蕉の「此筋は銀も見しらず不自由さよ」の付句の如く、錢以外に金銀貨など見たこともない連中が多かつたのである。この句も路用の小錢に困却した旅人が、田舎道の商人か小金持ちに無理に頼んで金銀貨を錢に両替してもらつたのであらう。この句を、素朴な田舎人が、狡猾な旅人から良貨を悪貨で無理に買はれたと解するむきもあるが、さうとるのは錢をかはるゝに囚はれた、餘りに穿ち過ぎた解ではなからうか。ところで前句との付合は、前句の景を田舎道の様と取り成したのであり、前句に広いところを丸ごと刈つて、冬の準備をとゝのへる

趣があれば、この句は多くの小錢に両替して路用にそなへる旅人の趣がある。さうして多くの小錢を少しの金銀貨に替へられた素朴な田舎人の立場から、錢をかはるゝと俳諧的に表現したものであらう。

かひこの臭き六月の末

化

(釈) 初裏二句目。夏(六月の末)。

(評) 養蠶には春蠶・夏蠶・秋蠶の別があるが、夏蠶は梅雨後の天候の加減で病氣にかゝり易く、黒変して腐れた病蠶の悪臭は特にひどい。六月の末と云ふので蠶が繭をかき始めた頃であらうか。病蠶は道傍に捨てたので、その臭ひが田舎道を行く町から来た旅人には、ひどく臭く感じられたのであらう。

雫たる網を一はい引ちらし

同

(釈) 初裏三句目。雫。

(評) 雫たる網を蠶の網ととり、病蠶の網を洗つてそこら一面ひろげ干してある景、と解することも出来るが、斯う解するのはあまりに物付的な見方であらう。この網は底引網等の漁獲用の網であらう。引揚げて間もない濡れをばつた網が、漁村の海浜に引きちらされてゐるのである。この句は前句に對付の様に付けられてゐて、一方がひなびた

農村の景であれば、この方は同じくひなびた漁村の様である。蠶の臭さに通ふものは、魚藻類のなまぐささである。

小屋敷並ぶ城の裏町

来

(釈) 初裏四句目。雑。

(評) あたり一ぱい引ちらされた網、漁村の混雑した小家の家並みから、小屋敷のごみくした城下の裏町通りに、連想を移したのである。農村から漁村、そして城下町へ目まぐるしく景は移動して行くのである。

謂分のちよつくと起る衆道事

同

(釈) 初裏五句目。雑。○謂分 言ひ分、口論。○衆道事 若衆道、男色沙汰。

「御仕置やぶれかぶれの衆道事 松意」〔談林十百韻〕

(評) 前句の城下町の裏通りの小屋敷から、さうした場所で行はれた男色沙汰を想定したのである。句意は口論なども時々起る衆道ごとだと云ふのである。

(以下次号)